

山方の五輪塔

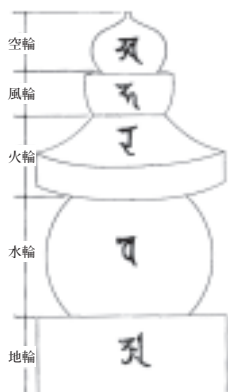
◇地震にも動じずに

山方総合支所の裏手、商工会山方支所の建物の南に大きな五輪塔があります。五輪塔は中世から江戸時代頃まで供養塔や墓塔として造られてきた石塔です。

五輪塔はその名のとおり、五つの部位からできていて、上から「空輪」「水輪」「火輪」「地輪」と呼ばれています。（左図）

五輪塔は仏教思想に基づいて中国またはインドからもたらされたと考えられています。

山方の五輪塔は高さ187センチ、最大幅77センチと大変大きなもので、凝灰質砂岩でできています。この石材は市内諸沢を始めたとして周辺で産出するもので、入手しやすい石材を使ったと考えられます。



▲五輪塔図解

◇五輪塔は誰の墓？

では、この五輪塔は誰を供養したものなのでしょうか。

地元では、常陸大掾氏で鹿島城（鹿嶋市）の城主「鹿島清房」のものと伝わります。この五輪塔は「清房さん」と呼ばれ大切にされてきました。



▲鹿島城（鹿嶋市教育委員会提供）

戦国時代後半、常陸北部を手中に収めた佐竹氏が、常陸南部を平定するために在地の勢力を一掃したとされる、いわゆる「三十三館仕置き」という事件がありました。天正十八年（一五九〇）、佐竹二十代の義宣は水戸城、府中城を攻め落とすと、翌年には常陸南部の鹿行地域の領主鹿島氏や中居氏、烟田氏らと同行した子や近臣を太田城に招き、宴席と見せかけて殺害したといわれています。（招いた口実や殺害場所については諸説があります）その後、ほど

なくしてこの地は佐竹氏に制圧されました。そのため、常陸北部の佐竹鼯負とは対照的に、今でも鹿行地域の人々は佐竹氏を快く思っていない、という話も聞きます。

さて、このうち鹿島城主については太田城ではなく、山方城で殺害された、とする説も伝わっています。五輪塔が常安寺の墓域にある（山方城の登城口から移動）のはそのためです。

しかし、史料上で確認できる戦国末期の鹿島城主は「清秀」（又六郎）であり、「清房」という人物の存在は確認されません。

五輪塔の主はどのように伝えられてきたのでしょうか。



▲山方の五輪塔

水戸市の和光院に伝わる「和光院過去帳」には、殺害された城主たちの名前を書き上げて「鹿島殿父子、カミ、島崎殿父子：已上十六人」との記載がありますが、「鹿島殿」の名前は明記されません。江戸時代後半の学者中山信名がまとめた地誌「新

編常陸国誌」では、地元の伝承と同じく「鹿島清房墓」と表記される一方、清房は襲撃に遭い諸沢村の会沢刑部の家にかくまわれるも、会沢の裏切りのため殺害され、祟りを恐れた会沢氏によって五輪塔が建立されたと記されます。

同じ頃に水戸藩の郡方役人加藤寛斎が書いた地誌「北郡里程間数之記」では、この五輪塔を「城主左貫土佐守ノ墳墓」であると村人がいつている、と記されます。

また、水戸藩の学者小宮山楓軒は文化四年（一八〇七）にまとめた地誌「水府史料」の山方の「五輪石塔」の項で「佐竹氏南方の諸館主を滅されし時、山方能登守に命じ、此地にて鹿島十郎治時を害せしと云。」と記しています。

和光院文書以外の三点の資料は、江戸時代後半のそう遠くないと思われる時期にまとめられたものです。が、記述はかなりまちまちです。

諸説伝えられてきましたが、移動を経ながらも大切に供養されてきた五輪塔には、征伐された南館城主たちを哀れむ、佐竹鼯負の当地の人々の気持ちが込められているのかもしれない。